

「私はそのひとり子、私たちの主、イエス・キリストを信じます」

使徒信条Ⅱ

堀田修一 22・9・11

「使徒信条」と「主の祈り」が毎週の礼拝のプログラムにあることは大きな恵みです。「使徒信条」は、2世紀後半ローマで集成された洗礼告白文。そのために、告白の主語が「私たち」ではなく「私は」。

I キリスト教信仰の告白の中心は、二つある。一つは「イエスは神であり人である唯一の救い主である」という信仰告白。もう一つは「父、子、聖霊の三つにして一つなる神を信ず」という三位一体の神についての信仰告白。①父なる神は、私たちの救いのご計画を立てられ、「創造と摂理」の御業において働かれ、②御子イエスは御父の救いのご計画を果たし、私たちの救いを成し遂げる実行者として「贖い」の御業において働かれ、③聖霊なる神は、御父が計画し、御子が成し遂げられた贖いを私たちにもたらし、キリストの聖に結びつける適用者として「聖化」の御業のために働かれる。

II 使徒信条「私はそのひとり子、主イエス・キリストを信じます」についての信仰告白を説き明したい。

1. 「そのひとり子」＝キリストなる神だけが、永遠から本来の神のひとり子である。父と子は永遠の初めから存在され互いに愛し合う神。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」ヨハネ3：16。私たちは主を信じて「神の子どもとなる特権」をいただくが、永遠の初めから神の真の「ひとり子」はイエス様のみ。と同時に、主を信じる私たちは、不従順の子であったが、主の恵みにより神の子どもとされる恵みは驚くべき神の愛である。御父は、特別な真の愛する独り息子のイエス様を与えるほど私たちを愛し、滅びる者であった私達を神の愛する子どもとされている。神に感謝し、神を崇めます。
2. 「私たちの主」＝「イエスは主である」との告白は、古代教会の洗礼の時に受洗者の信仰告白。「イエスは救い主である」も正しいが、新約聖書の信仰告白では「イエスを主と告白し」（ローマ10：9）で統一されている。Iコリント12：3後半も。「すべてが膝をかがめ、すべての舌が『イエス・キリストは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰すためです」ピリピ2：10、11。「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主（キュリオス：主人、所有者、主、神）です』と言うことはできません」Iコリント12：3は、当時の教会の信仰告白の定式を伝えている。この信仰告白が成立した背景には、当時の支配国、ローマ帝国崇拝に際して要求した「皇帝は主である」との告白に対するキリスト者の抵抗の歩みがあった。当時のキリスト者達は、ローマの皇帝崇拝強制という迫害の中で、自らの信仰を証しするためにあえて「イエスは主である」との信仰告白を、「カエサルは主である」との市民的告白に対抗して用いた。彼らにとって「イエスは主である」との告白は、他のいかなるものも「主」としないという告白であり、主を信じる者にとり、ものすごい権威、権力を持っていた皇帝でさえも「主」ではあり得なかった。その結果として、この短い告白のために多くのキリスト者たちは殉教（主を信

じる信仰のために処刑される)の道を進むことになったが、それでも彼らはこの信仰告白を曲げることをしなかった。「ローマの殉教者」という本に、「初代教会の信者たちは、…主のみことばを思い出し、また主の十字架を忍んで、堅く信仰に立ち、復活の命、永遠の御国、天の祝福を望んで、御名をたたえつつ、殉教の死を迎えたのであった」と記されている。日本も第二次世界大戦まで、天皇は現人神(あらひと神)として崇められていた。その世界大戦の敗戦後、天皇は、日本国民にたいして、自分は神ではなく、人間であると「人間宣言」をされた。それ以前の日本の教会、キリスト者にとり、天皇を神とするかイエス様を主、神とするかの信仰的な戦いがあった。※私は、この説教を準備しつつ、神が歴史の信仰の戦いの中で教会に与えられた「使徒信条」の大切な重みを自覚させられている。自らが「使徒信条」の重みを学びながら説教できることを感謝しつつ、自分自身が「使徒信条」を大切に告白し続けたい。皆さんにとり「使徒信条」の内容をますます理解されることが信仰の恵みとなりますように。何故キリスト者は、迫害の中で主への信仰告白に生きることができたのか。それは、主イエスが、金や銀ではなく御自身の尊い血(命懸けの愛と苦しみ)によって、私たちを罪と悪魔のすべての力から救い出し、買い取ってくださり、私たちの体も魂も、人生もすべてをご自分のものとされたからである。「あなたがたが先祖伝来のむなしい(真の救いを与えない)生き方から贖い出された(主の十字架の血という尊い代価により私たちを永遠の滅びから買い戻され私たちを主のものとした)のは、銀や金のような朽ちるものにはよらず、傷もなく汚れ(罪、悪が全くない)もない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです」Iペテロ1:18, 19。

3. 「イエス」の原語の意味は「主(ヤハウエ)は救い」。「イエス」という呼び名は、名前を指す。「キリスト」は、神からの大切な役職を指す。「主は救いである」という名を持たれるイエス様は、私たちを私たちの罪から救うために世に来て下さり、十字架と復活の御業を通して贖いを成し遂げて下さった。
4. 「キリスト(原語:油注がれた者)」。これは、救い主のお名前が「イエス(主は救い)」に対して、「キリスト」は称号、職務を指す。旧約時代、預言者・大祭司・王に油注ぎ(オリーブ油。油注ぎは御聖霊の注ぎの象徴)がなされ任職された。主イエスは、父なる神から聖霊により油注がれ任職された→公生涯に入られるとき「イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると見よ、天が開け、神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来られるのをご覧になった。…天から声があり、こう告げた。『これはわたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ』」マタイ3:16, 17。
 - ①主イエスは、私たちの最高の預言者、子なる神として神御自身を説き明された。「いまだかつて神を見た者はいない。父の心とところにおられるひとり子の神が、神を説き明されたのである」ヨハネ1:18。主イエスが預言者という場合「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人(イエス・キリスト)に聞き従わなければならない」申命記18:15の預言の成就のメシヤ。使徒3:22, 7:37も参照。預言者への油注ぎの箇所=「エリシャに油を注いで、あなた(エリヤ)に代わる預言者とせよ」I列王記19:16。
 - ②主は私たちの唯一の真の大祭司(神と人の仲介者)として、ご自分の体により十字架で私たちを贖い、天の御父の御前で私たちのために絶えず執り成しておられる。「イエスは永遠に存在されるので、変わることがない祭司職を持っておられます。したがってイエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救う

ことがおできになります」ヘブル7：24, 25。大祭司の油注ぎの箇所＝「大祭司で、頭に注ぎの油が注がれ、任職され」レビ21：10

- ③主イエスは、私たちの永遠の王として、ご自分のみことばと力強い権威により、私たちを治め、十字架で獲得された贖いのもとに私たちを守り保って下さる。「わたしは天においても地においても、すべての権威が与えられています」マタイ28：18。「その方（主イエス）は血に染まった衣を着ていて、その名は『神のことば』と呼ばれた。…その着物にも…『王の王、主の主。』という名が書かれていた」黙示録19：13, 16。「子羊は主の主、王の王だからです」17：14。王の任職に油が注がれる箇所＝
「主は言われた。『さあ、彼（ダビデ）に油を注げ。この者がその人（神が立てられる王）だ。』サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った」Iサムエル16：12, 13。

5. 「信じます」。信じるの原語の意味「信じる、信頼する、任せる」。主を救い主、主、神と信じ、信頼し自分を主に任せ委ね、主を心に受け入れる。主の人格と御業により頼み、信頼する、自分を委ねる。信仰とは洗脳ではなく聖霊により知的にもみことばを学び、聖霊により意思をもって主を信じ受け入れる。
聖霊により感謝、喜びも与えられる。

祈り：「使徒信条」を心を含め感謝しつつ告白させて下さい。